

日本音楽学会 2024 年度音楽関係学術イベント開催助成金（第 2 期採択）

ブルックナー生誕 200 年記念イングリット・フックス教授特別講演会

「ウィーンの音楽生活におけるブルックナーの位置、およびその交響曲の受容について」

傍聴記

高松 佑介

2024 年 11 月 23 日、アントン・ブルックナーの生誕 200 年を記念して、京都市立芸術大学の池上健一郎教授の企画により、イングリット・フックス教授 (Prof. Dr. Ingrid Fuchs) の特別講演会が開かれた。フックス氏はウィーン楽友協会アルヒーフの副室長を務められたことでよく知られているが、その前には長年リンツのアントン・ブルックナー研究所でも資料研究に従事された経験をもつことから、まさに本企画に適任の人選である。講演では池上氏が司会を務め、氏の訳した原稿を京都市芸術大学音楽学専攻 3 回生の前田依泉^{いずみ}氏がパラグラフごとに読み上げる形で進行した。なお、京都市立芸術大学崇仁キャンパスでの対面と Zoom によるオンラインを併用するハイブリッド型で行われ、執筆者はオンラインで聴講した。

今回の講演の主眼は、ステレオタイプな決まり文句となっている「ブルックナー像」を再考することに置かれていた。1924 年の芝居のタイトル「神の楽師 Der Musikant Gottes」にも顕著に示されている「素朴／うぶ」「不器用」「田舎者」「信心深い」といった通俗的なイメージは、伝記作家アウグスト・ゲレリヒも捕らわれていたものであり、100 年経った現在でも——学術的な議論が進展しているにもかかわらず——世間的には払拭されていないとフックス氏は警鐘を鳴らす（執筆者が講演者に個人的に確認したところによると、「田舎者」と訳された原語の „bäuerlich“ は形容詞で、ドイツ語では派生元の名詞「農民 Bauer」に即した「農民の出自」の意味も強くまとっているが、ブルックナーは農民の出自ではない）。こうした問題意識を根底に、講演は時系列でブルックナーの生涯と交響曲を追いながら、客観的事実を確認してゆくという構成で進められた。ここではその中から、「ブルックナー像」に関連する視点を 2 つ記しておきたい。

1 点目は本人の外見についてである。ブルックナーは上流階級とは正反対の田舎風の見目で、それが逆に独創的な芸術家像を引き立てていたとされている。しかし実際のところは宮廷楽団の一員として制服を着る義務があり、1874 年以降は濃い青色に銀の刺繍が施された燕尾服に色の濃いズボンという格好だったことが近年明らかになったという。フックス氏は、この「洗練された服に身を包んだ宮廷オルガニスト」という姿がブルックナーのイメージにそぐわなかったため、弟子や友人たちによる当時の資料のどこにも取り入れられなかったのではないかと述べ、さらに作曲家自

身もある程度は自己演出していただろうとの見解も付け加えた。

2点目は、作品の受容の舵取りについてである。たとえば《交響曲第4番》は「ロマンティック」の愛称で知られるが、これは作曲当初から付けられていたわけではなく、ヴィルヘルム・タッペルトに演奏を打診した際にブルックナーがはじめて称したもので、演奏用の楽譜を送る際には更なる注釈をスコアに書き込んだという。フックス氏は、こうした一種の標題性が、ワーグナー派で進歩主義のタッペルトを味方に付けるための戦略だったとの解釈を示した。当時の音楽界の論壇は「ワーグナー派」と「ブラームス派」に二分され、ブルックナーがワーグナーへの傾倒を表明したためにハンスリックから「ワーグナー派」の刻印を押されたという事実は広く知られているが、ブルックナーはこうした状況をむしろ利用していた節もある、というわけだ。1873年にブルックナーが入会した「ウィーン学術ワーグナー協会」も、彼を「交響曲のワーグナー」と称して一種のプロパガンダを発信したことで、ウィーンにおいては不利に働いたものの、逆にドイツでは各地のワーグナー協会やワーグナー寄りの指揮者たちの協力が得られるようになり、演奏機会の増加に一役買ったと考えられる。この観点は、フックス氏が1週間後に東京音楽大学で行った講演会において、さらに詳しく取り上げられることとなった。

以上のような視座をブルックナーの伝記的解説に盛り込むことで、フックス氏は「誤解された哀れで貧しい作曲家」というお決まりのイメージが、ロマン主義的な芸術家像を正当化するために、ブルックナー本人や特にその信奉者たちによって意図的に作り出されたものだったと結論付けた。

もし惜しまれる点を付記するとすれば、冒頭でブルックナー像を見直すと銘打ちつつも、時系列順に事実を列挙する形で講演が進行したため、どの点をどのように書き換えるべきかが具体的に強調されなかったことである。特に、「ウィーンという都会の社交界に馴染めなかった」「宮廷的ヒエラルキーを心得ていなかった」というある種“古い”ブルックナー像も事実混在していたことから、たとえば作曲家自身や取り巻きたちが意図的に「ワーグナー派」としての立ち位置を演出することで上演の機会を探っていた、というようなフックス氏の“新しい”見方がぼやけてしまったように感じられた。また、事前に募集されていた、講演内容を必ずしも反映していない質問のみで質疑応答の時間が終わってしまったのも残念であった（なお対面の参加者は引き続き質問する機会が設けられた）。しかし裏を返せば、質疑の時間が十分に取れないほど時間的・内容的に充実した講演だったともいえよう。